

第Ⅲ章 中近世遺跡

第三章 中近世遺跡

1. 歴史的概要

(1) 中近世遺跡の概要

中世末期の佐渡においては、西三川砂金山、鶴子銀山、新穂銀山等が主要な金銀山であった。また、近世には、当時の我が国最大の金銀山であった相川金銀山が開発され、佐渡から産出された金銀は幕府の財政を支えた。

西三川砂金山は、11世紀末の説話集『今昔物語集』に登場する佐渡最古の金山とされ、19世紀末まで稼がれた砂金山であり、中世から近代に至る砂金採取の技術を示す遺構群と砂金採取集団によって成立した集落から成る。

鶴子銀山は、相川金銀山が開発されるまで佐渡最大の鉱山であり、露頭掘り跡や間歩群などの採掘跡と、代官屋敷跡などの政治関連遺構などから成る。ここでは、自然地形を利用したテラスや道跡・井戸跡などの遺構が確認され、職住一体の生産活動が行われていた可能性が高い。

新穂銀山は、16世紀には鶴子銀山に匹敵した鉱山であり、採掘跡と集落跡によって構成される。江戸初期には相川金銀山の山師も加わって、幕府による経営が行われたが、慶安2年(1649)の大盛りを最後に衰微した。

相川金銀山は、16世紀末から20世紀末まで我が国最大の金銀産出量を誇った鉱山で、鉱山と政治に関連する遺跡から成る。その端緒となった上相川は、16世紀末に成立した鉱山町で、それまでの小規模な生産単位とは異なった生産活動の誕生を示す20haもの広大な遺跡である。江戸初期、大久保長安が相川に陣屋を築いて以後、鉱山管理と金銀の集積機能を併せ持った陣屋からは、第一の稼ぎ場所である割間歩へ1本の道がつけられた。記録によれば、その両側には選鉱業者たちの家が建ち並んでいたという。

また、こうした生産形態は時代が下るとさらに集約化され、宝暦9年(1759)、それまで町中に散っていた床屋などの作業場を奉行所内に集約するため寄勝場を設置し、作業の効率化を図った。しかし、18世紀の半ばからは、鉱脈の質の低下や間歩の水没などにより金銀の産出量が低下したが、幕府によるさまざまな対策の下、盛衰を繰り返しながら、幕末を迎えた。

金銀の産出量をはじめ各時期の最新技術の導入など、佐渡金銀山が日本の鉱業史及び経済史に果たした役割の意義は大きい。

以下、史跡指定地について詳述する。

(2) 鶴子銀山跡

鶴子銀山跡は、佐渡金山の約1.2km南方、大佐渡山地丘陵部の佐渡市沢根及び沢根五十里、

相川下戸村地内の標高約 50~420m付近に立地している鉱山遺跡であり、範囲内には銀山の代官所跡と推測されている「鶴子鉱山代官屋敷跡」や鉱山集落があった「鶴子荒町遺跡」を内包する。天文 11 年(1542)の発見とされ、近世・近代に継承される鉱山の出発点となるもので、相川金銀山が開発される以前まで佐渡最大の銀山であった。天正 17 年(1589)越後国の大名であった上杉景勝が佐渡攻めを開始したが、その背景には、鶴子銀山など佐渡の金銀山掌握が目的であったとされており、同年に佐渡が上杉氏の支配地となると、景勝は銀山経営のために鶴子外山に陣屋を建て（鶴子鉱山代官屋敷跡）、代官を置いて銀山の経営を統括させた。

石見国より来島した石見忠左衛門、同弟忠次郎、石田忠兵衛らによって鶴子の「本口間歩」が稼がれた。「本口」は坑道の口を指す用語と推測されることから、当時の最先端技術であった横相による「坑道掘り」が導入された場所と考えられている。また、史料からは確認できないものの、石見銀山から銀の製錬技術である「灰吹法」が伝わったのもこの頃と推測されている。このような新たな鉱山技術の導入により、「鶴子千軒」ともいわれるほどの繁栄期が訪れ、物資搬入港であった沢根港が栄え、同地には商家が軒を連ねた。

鶴子銀山の繁栄は、鶴子の奥山と呼ばれていた相川金銀山開発をも促し、慶長元年(1596)以降、相川で良質な金銀脈が発見され、道遊の割戸・父の割戸・六十枚間歩などの大規模開発を契機として、相川金銀山はゴールドラッシュを迎えた。同年、徳川家康によって佐渡代官（のちの佐渡奉行）に任じられた大久保長安は、金銀山開発に沸き立つ相川を政治経済の中心とするため、慶長 8 年(1603)鶴子の陣屋を相川に移転（翌年完成）し、相川市街地の整備を進め、これに伴い鶴子の鉱山集落にあった町屋や寺院も次第に相川へ移転していったといわれている。

慶長 9 年(1604)、長安によって金銀山経営に直山制が導入され、幕府の直営による金銀山開発が行われ、鶴子銀山でも多くの御直山の間歩が開坑した。慶長期後半～元和期にかけて、銀山は衰退へ向かったが、慶安年間（1648～1652）以降、西五十里村を拠点とした山師秋田権右衛門によって、屏風沢・仕出喜沢・松ヶ沢・百枚平を中心に再開開発が行われた。これにより、秋田権右衛門は莫大な財産を得たといわれ、その財力をもとに西五十里村に吉祥寺や金北山神社を建立・再建した。

秋田氏による開発以後、産出量の減少に伴い銀山は次第に衰微し、幾度かの休山と再開を繰り返すようになった。生産性の低い間歩は廃棄され、大規模な開発が可能な場所に立地し、有力な脈が存在した間歩のみで断続的な採掘が行われた。宝暦 13 年(1763)には百枚間歩が再興されて、銅の採掘が開始された。天明 8 年(1788)に銅山取明として鶴子間歩及びしなみ沢水貫の開発が進められ、宝暦年間以降、銅山としての性格を強めていった。江戸時代後半には、弥十郎間歩が再興され、長期間にわたる採掘が行われている。

明治 2 年(1869)相川金銀山が官営「佐渡鉱山」となると、鶴子銀山は「相川鶴子鉱区」として佐渡鉱山に組み込まれた。明治初期には小規模な採掘が行われたが、明治 20 年代に本格的な近代化が進められ、明治 23 年(1890)鶴子堅坑の開削、明治 27 年(1894)鶴子～沢

根間に軽便鉄道が開通するなど、大規模な資本投入が成されたことで、一時的に産出量が増大した。

明治 29 年(1896)相川金銀山とともに鶴子銀山も三菱合資会社に払い下げられ、以後、三菱による採掘が続けられた。昭和 10 年代には国策による銅の採掘が続けられたが、昭和 21 年(1946)鉱量枯渇により閉山となった。

相川金銀山に先行して開発が進められ、その繁栄が相川における金銀山開発の端緒となったという歴史的な位置付け、戦国時代から江戸時代に至る佐渡の鉱山採掘技術の歴史をそのシステム全体の変遷として示しうる点において、鶴子銀山跡はきわめて貴重な遺跡である。

(3) 相川金銀山跡

① 佐渡奉行所跡

佐渡奉行所は、慶長 8 年(1603)、大久保長安により鶴子の陣屋を現在の相川上町台地に移したものである。これは、相川の鉱脈が優良であったこと、沢に挟まれた天然の要害という地形、また相川の海が一望できるという立地条件が、物資の輸送や町づくりに好都合であったためと考えられている。敷地内には御米蔵のほか、運上金銀を保管する御運上蔵、油蔵・材木蔵・煙硝蔵からなる御雑蔵、銀の製錬に使用する鉛を保管する鉛蔵などがあり、国内の他の奉行所には無い鉱山管理という特性を持っていた。また元和 7 年(1621)に小判を鑄造するための後藤役所が置かれ、宝暦 9 年(1759)には町内に散在していた選鉱・製錬工程をまとめた施設である寄勝場が建てられるなど、佐渡の鉱山経営と行政の中心であった。なお、佐渡奉行所は江戸時代の正保 4 年(1647)、寛延元年(1748)、寛政 10 年(1799)、天保 5 年(1834)、安政 5 年(1858)と 5 度の火災に遭ったが、その都度再建された。安政 6 年に再建された建物の大部分が昭和 17 年(1942)の焼失まで残っており、明治維新後は、佐渡県、相川県、佐渡郡役所などの行政庁舎として使用された。現在の建物は平成 12 年(2000)に安政 6 年の絵図を基に復元されたものである。

② 道遊の割戸

相川金銀山の優良鉱脈の一つとして、江戸時代に稼がれた道遊脈の露頭掘りの跡で、慶長 6 年(1601)割間歩とともに採掘された相川金銀山最古の一坑である。その形状は、金掘り大工の握る鑿が長い年月の間に山を掘り崩し、二つに断ち割られたもので、小さい山の中央部をV字型に割った姿をしており、頂上部の裂け目の大きさは幅約 30m、深さ 74m に達する。この道遊の割戸は、相川の様々な場所から眺めることができ、金銀山のシンボルとなっている。

③ 宗太夫間歩

宗太夫間歩は、相川金銀山の最高最大とされる青盤脈の西端に当たる「割間歩」の一鉱

区として開発された。その名称から、大久保長安の家臣として慶長年間に鉱山開発に活躍した岩下惣太夫と関連のある坑道といわれる。岩下は、宗岡佐渡・草間勝兵衛とともに相川にいて大久保長安の指示で銀山をとりしきった。

宗太夫間歩は、江戸時代としては画期的な大型坑道で、鉱石の運搬や排水作業の便等を十分考慮に入れ、効率的な採掘稼働を目的とする「斜坑道」の代表例である。元禄時代初頭に荻原重秀によって進められた鉱山開発により鉱石の運搬機能と技術が発達し、本間歩も主力間歩の一つとして稼行したと考えられる。

④ 大久保長安逆修塔・河村彦左衛門供養塔

相川江戸沢町の大安寺境内にある。

大久保長安は慶長8年(1603)に佐渡奉行に任じられ、直山制と呼ばれる直営形態で鉱山を経営して、金銀山開発の基礎を築いた。石見(島根県)・伊豆(静岡県)の金銀山の奉行も兼ねていて、金銀増産の功績は大きく、徳川家康の信任もあつかったが、死後、所領を没収され、一族は切腹を命じられた。逆修塔は、長安が自分の死後の冥福を祈るため生前に仏事を行って建てたものである。越前(福井県)の笏谷石で作った宝篋印塔で、法名と慶長16年(1611)の年号が入っている。

河村彦左衛門は上杉景勝の家臣で、佐渡代官として佐渡を支配していた。景勝の会津移封後も、佐渡の国情に詳しいことから佐渡にとどまり、金銀山の開発につとめる一方、慶長5年(1600)には佐渡一国検地を行った。慶長7年(1602)家康に罷免されて佐渡を去り、慶長13年(1608)に没した。供養塔は、均整のとれた堂々たる五輪塔で、慶長13年(1608)の年号が入っている。

これら石造物がある大安寺は、慶長11年(1606)大久保長安が京都から大雲院聖誉貞安を招聘して開基した浄土宗寺院である。その後数回の火災により規模が縮小されて現在に至る。大安寺境内には、長安の代官宗岡佐渡が寄進した慶長14年(1609)銘の名号石塔、佐渡奉行所を建てた棟梁水田与左衛門の五輪塔、地役人田島四郎右衛門の五輪塔など江戸時代初期の石造物が多く残っている。

⑤ 南沢疎水道

南沢疎水道は、元禄4年(1691)に起工し同9年に完成した佐渡金銀山最大の排水坑道で、測量の精度など当時の技術水準を示す遺構である。優良な鉱脈の多くが谷底や海面よりも下にあった相川金銀山の採掘の歴史は、水との戦いの歴史でもあった。初期の頃は、山上に近い地表部の鉱脈を対象に採掘が行われていたが、慶長10年(1605)頃から、谷底よりも深い鉱脈が圧倒的に多くなり、これに対処するために、下流の谷底から水貫を兼ねた坑道を掘る技術が生まれた。割間歩から相川湾まで全長約1kmの南沢疎水道はすべて手掘り作業で掘り進められ、工区を3区分して6か所から掘り進めるという、当時としては画期的な工法によるものであった。また、測量を担当した静野与右衛門は、オランダ人のカスパ

ルから鉱山測量術(振矩術)を学んだ樋口権右衛門の弟子である土田勘兵衛の門人であった。疎水道は現在も坑内の排水機能を保ちつづけている。

⑥ 鐘楼

鐘楼は相川味噌屋町にある。かつては奉行所内に太鼓を置いて時を知らせていたが、荻原重秀奉行の指示で、正徳 2 年(1712)相川六右衛門町の広伝寺境内に鐘堂を建て、住民に時刻を知らせたのが時鐘の初めである。この時鐘は、広間(奉行所)まで聞こえなかったため、味噌屋町に移されることになった。翌年 5 月に佐渡産出の銅で鐘を鑄造し直し、味噌屋町の鐘楼を改築して、その日の正午より撞きはじめたという。天保 5 年(1834)の相川上町の大火で焼失したが、鐘は被災を逃れた。その後鐘楼は万延元年(1860)に改築された。なお、収められている銅鐘は荻原重秀の命により佐渡産出の銅で鑄造し、正徳 3 年(1713)6 月 6 日から撞き始めたという記録がある。

(4) 石切場跡

① 吹上海岸石切場跡

吹上海岸は球顆流紋岩が多く、鉱山で最も需用が多かった鉱石粉成用の石磨(上磨)の供給地であった。吹上海岸では、江戸時代に石磨の材料として石材が盛んに切り出されたのち石切町で加工されて、鉱山に供給されていた。こうして製作された石磨は夥しい量にのぼり、現在でも相川市街地内や山中の鉱山遺跡等で目にすることができる。このようなことから吹上海岸石切場跡は、江戸時代に相川金銀山へ石磨を供給し続けた重要な石切場であることがわかる。

② 片辺・鹿野浦海岸石切場跡

片辺・鹿野浦海岸は花崗岩質礫岩を産出し、金銀山で使用される石磨(下磨)の産出地であった。『佐渡年代記』などによれば、慶長年間に播磨国(摂津国カ)見影から「四兵衛」「源右衛門」の 2 人が来島し、相川の石切町(現在の下相川)に居住して、元和～寛永年間(1615～1643)頃、島内で金銀山に使用する石磨に適した石材を捜し求めた結果、片辺の鹿野浦で良質の石材を見つけ、同地に石磨用の石切丁場を開いたとあり、石切場の開始時期が判明している。以降、石磨(下磨)の石材供給のため、下相川の石工を中心に採石が続けられ、天和 2 年(1682)には 24 か所の丁場があった。ここで採石された石材は、石船と呼ばれる船で下相川へ運搬され、下磨に加工されたうえで、金銀山に供給された。このようなことから片辺・鹿野浦海岸石切場跡は、江戸時代に相川金銀山へ石磨(下磨)を供給し続けた重要な石切場であることがわかる。

片辺・鹿野浦石切場跡には、吹上海岸石切場跡と同様に石材を切り出した痕跡や矢穴が遺存する。